夢で見た「こもかぶりの如来」

ふるさとお寺めぐり 15

真宗大谷派

常行山（じょうぎょうざん）　能代市萩の台5―19

願勝寺（がんしょうじ）

住職　第20世　下妻　正規

梵鐘の戦時供出に嘆願運動も出た〝鐘突き寺〟の願勝寺

昭和24年の第1次能代大火の際に運び出された系図、明和3（1766）年に第9世圓喜が寺社奉行に出したとみられる「覚」などによると、開基したのは、坂東（関東）下妻（茨城県下妻市）の住人、仙慶の子孫の空賢とされる。永正2（1505）年に能代に草庵を構えた。そして第2世圓喜が永禄6（1563）年に本山の許しを得て願勝寺の寺号を公称したと記す。

圓喜は慶長11（1606）年、96歳で亡くなったが、慶長9（1604）年には羽州の〝拠点〟と一向一揆の〝拠点〟となっていた久保田（秋田市）の浄願寺と親交。本願寺の東西分裂にも遭遇し寺を東本願寺（真宗大谷派）に導いた。江戸時代には寺領20石を拝領した。

仏具類は第4世圓空の代に整えられた。本尊の阿弥陀如来像は、別称「こもかぶりの如来」と言われ、不思議な逸話がある。

圓空は、寺にふさわしい仏像を求めるため圓勝寺（脇寺で現在廃寺）の住職と京都に出掛けた。足が棒になるほど京都の仏具屋を歩き回ったが、お目当ての仏像は無く、帰ることになった前日の夜、2人は「三条小橋に行ってみなさい」という奇妙な夢を見た。2人は翌朝、同じ夢だったことに驚き、夢で告げられた場所に早速、出掛けた。その情景は夢で見たのとそっくりだった。すると、向こうから若者がこもむしろに包んだものを大事そうに抱えてやってきた。圓空は若者を呼び止めてこも包みの中を見せてもらったところ、立派な阿弥陀如来像が現れた。気に入った圓空は、譲ってもらおうと、話し掛けようとしたら不思議なことに若者の姿は消えていた。「夢で見せてくれた授かり物」と圓空は寺に持ち帰り、本尊としてまつった。これを聞いた門信徒はいつの頃からか「こもかぶりの如来」と呼ぶようになったという。

江戸時代末から明治にかけての寺の様子については、郷土史家の越後昌二氏が残した記述（メモ）に、長慶寺の授戒で、曹洞宗の高僧奕堂禅師〈注①〉（1805―1879年）が訪れた折、金光寺の坂の上から能代の市街地を眺めたところ、一段と高き願勝寺の屋根を見て「尊き御佛像安置せりとおうせり」とある。

寺は明治33年に焼失、仮本堂から昭和3年に第17世圓順の代に再建された。近年、その時の建設中の本堂を撮った写真が門徒から寺に寄進された。本堂は、大きなやぐらが組まれ、偉容から推測して奕堂禅師が金光寺の坂から眺めた焼失前の本堂も相当大きなものだったと想像された。

戦前、寺には鐘楼があった。大町の豪商、初代越前谷久右衛門の妻が、仏恩に感謝して慶安元（1648）年、梵鐘、鐘楼堂とともに寄進した。梵鐘の鋳物師は近江国辻村（滋賀県長浜市南高田町）の田中伊兵尉藤原家次と伝えられる。嘉永6、7（1853、1854）年に幕末の黒船来航に伴う異国船警備の大砲製造で供出されたが、難を逃れて一時返却され、明治維新後は能代港町の所有となり、長根町にあった寺に戻された。以来、近くの伊勢屋が鐘突きを専従で奉仕。時計が普及していなかった時代にあって住民に時を告げる鐘として重宝がられ、寺は「鐘突きの寺」として親しまれた。昭和17年に戦時供出された。その折、婦人会などから「持っていかないでほしい」との嘆願運動が起きるなど、住民生活に無くてはならない存在だった逸話を残す。

偉容を誇った寺も昭和24年の第1次能代大火で類焼。現在の能代市民体育館付近から28年に現在地に移転した。

当時、能代市長は柳谷清三郎氏（1900―1984年）〈注②〉だった。都市計画事業で長根町にあった寺院を萩の台に移転させる計画に、自らが役員を務める同寺を他寺院に先駆けて移転することで、事業を軌道に乗せようと一番先に同寺に「白羽の矢を立てた」という。44年に現本堂などが完成した。

58年5月26日の日本海中部地震（マグニチュード7・7）で庫裡が全壊したが、平成2年に復旧。13年5月には、同寺関係者が念願としていた山門を焼失以来52年ぶりに復興、盛大な竣工式を行った。12年に本堂南側に駐車場を整備した。

また、寺はボーイスカウト秋田第6団の団事務所でもある。先代の下妻正順氏が、少年の育成活動に共鳴して昭和33年の発団に奔走した。

注① **奕堂禅師**　名古屋市出身で、諸岳（獄）奕堂。永平寺・總持寺の内紛を収めて總持寺独住第1世に就任した高僧。

注② **柳谷清三郎**　東大政治学科卒。昭和21年から能代市長通算5期、その間33年から38年まで衆議院議員（自民党）連続2期。戦後2度の能代大火の復興に尽力。50年に能代市名誉市民。

本尊の阿弥陀如来像（左）と「兆殿司」の作といわれる達磨大師絵像

【寺宝】本尊は春日の作と伝えられる阿弥陀如来像。達磨大師絵像は南北朝から室町時代にかけての画僧「兆殿司」の俗称を持つ明兆（1352―1431年）の作とされる。浄土門仏教の伝来と布教に努めた聖徳太子、蘇我馬子、小野妹子、法然や親鸞などを描いた光明本。紺紙金泥の六字名号。

【行事】修正会（1月1日）春秋彼岸会（3月、9月）盂蘭盆会（8月）永代経（6月第1日曜日）報恩講（10月最終金・土・日曜日）親親会（毎月第1金曜日）婦人十日会（毎月10日）十五日講（5、6、7、9、10、11、12月の各15日）声明教室（毎月20日）同朋の会（毎月第4日曜日）宗祖御命日（1、4、5、6、8、9、11月の各28日）

【門徒総代】▽責任役員＝下妻浩恵（萩の台）塚本真一（昌町）▽総代＝柳谷渉（砂留山）齊藤伸哉（柳町）武田吉太郎（昌町）塚本政義（鳳凰台）松井均（明治町）

文化